

学校の魅力化及び活性化への取組 ～瀬戸内町との連携～

古仁屋高等学校 教頭 吉井 秀一郎

1 はじめに

本校は昭和5(1930)年に『大島郡東方村立古仁屋家政女学校』としてスタートした創立91周年を迎える普通科の高校である。以後、昭和14(1939)年に『鹿児島県古仁屋実科高等女学校』、昭和18(1943)年に『鹿児島県古仁屋高等女学校』へと学校改編に伴い校名を変更してきた。

さらに、戦後間もない昭和22(1947)年に鹿児島県古仁屋高等女学校と古仁屋町立青年学校が合併し『古仁屋町実業高等学校』が誕生し、現在地(奄美大島要塞司令部跡)に移転したが、昭和24(1949)年に「名瀬の高校への進学は負担が大きすぎる。是非地元の新制高等学校設立を」という地域の強い願いがあり『瀬戸内学校組合立古仁屋高等学校』の設立が決まった。

当時の奄美群島は米軍の統治下にあり、設置者も古仁屋町・西方村・実久村・鎮西村・宇検村から成る「古仁屋町外四ヶ村瀬戸内学校組合」から「臨時北部南西諸島政庁」、「奄美群島政府」と変わり、昭和28(1953)年12月25日に日本復帰が成ると、「鹿児島県」を設置者とする『鹿児島県立古仁屋高等学校』が誕生した。

このように、本校には地域の先人が設置し、支援してきた高校であり、この歩みは現在も郷土の高校として、地域から強い期待が寄せられ、熱い眼差しが注がれ続ける源となっている。

令和3年12月現在、100名の生徒が在籍しており、25名が県外の中学校の出身者である。その中の23名が地域みらい留学生であり、全校生徒の2割を超えている。



2 支援体制

本校の生徒は瀬戸内町からの支援策に支えられており、支援体制の中核を成す組織を挙げておく。

(1) 古仁屋高校活性化対策協議会

ア 発足

平成24年8月に設立した古仁屋高等学校振興対策協議会を解散して、令和2年11月に発足

イ 目的

「古仁屋高校は本町の最高学府であり、本町の活性化の原点は、教育にある」という信念に基づいて、町民が安心して暮らせる教育環境を整えるとともに、鹿児島県立古仁屋高校の存続及び振興・発展に繋がる事業を考案及び推進するため。

ウ 事業

- (ア) 古高の存続に関する事項
- (イ) 古高の振興対策に関する事項
- (ウ) 古高と各小中学校との交流連携活動の推進
- (エ) 古高の地域と連携した地域活動・教育活動の推進
- (オ) その他必要な事項

エ 構成員

瀬戸内町長，瀬戸内町副町長，瀬戸内町議会議長，瀬戸内町教育長，瀬戸内町教育委員会総務課長，瀬戸内町教育委員会指導主事，瀬戸内町総務課長，瀬戸内町P T A連絡協議会長，古仁屋高等学校P T A会長，古仁屋高等学校校長，古仁屋高校同窓会会長，瀬戸内町小学校校長代表，瀬戸内町中学校長代表，瀬戸内町商工会長，瀬戸内町企画課長，古仁屋高校振興コーディネーター，古仁屋高校支援コーディネーター

オ 事務局

瀬戸内町役場企画課古仁屋高校活性化対策室

(2) 瀬戸内町役場企画課古仁屋高校活性化対策室

ア 設置日

平成31年4月1日

イ 設置の経緯

平成24年8月に古仁屋高等学校振興対策協議会を設立し，各部会で協議を重ねたが，抜本的解決策が出ないまま生徒数の減少が続き，平成29年以降は協議会の開催が見送りとなっていた。

そこで，平成31年4月に生徒数減少への打開策として「地域みらい留学」へ参画した留学生の募集と受け入れを決め，そのための課題であった寮の整備及び設置問題等の受け入れ体制の確立及び事業の安定した継続のために，同年4月に瀬戸内町役場企画課内に古仁屋高校活性化対策室を設置した。

ウ 設置の目的

古仁屋高校の振興・発展を目指す上で，瀬戸内町と高校，コーディネーターと高校との連携を進めて課題解決に取り組むため。

エ 担当と役割

(ア) 室長

古仁屋高校活性化に伴う全てに関すること

(イ) 振興コーディネーター（2名）

- ① 生徒募集活動・広報活動（企画立案・資料作成・イベント参加等）
- ② 古仁屋高校学生寮の管理・運営に伴う事務
- ③ 留学生のコーディネート，プロモーション，留学生の生活面などの支援
- ④ 留学生の活動報告や近況報告をSNSやTwitterを活用して情報発信
- ⑤ 県外に出向いて説明をするなど，留学生を増やすPR活動
- ⑥ 高校生自らが地域と学校に魅力を感じる機会を策定
- ⑦ 地域について理解を深める課外授業のコーディネート
- ⑧ 生徒が関わる保護者との連絡等

(ウ) 支援コーディネーター（1名）

- ① 生徒募集活動・広報活動（企画立案・資料作成・イベント参加等）
- ② 学校と瀬戸内町との業務調整
- ③ 寮生保護者との寮運営及び寮管理等に係る調整
- ④ 寮運営に伴う予算執行
- ⑤ 古仁屋高校活性化に伴う予算全般
- ⑥ 活性化対策室HP管理
- ⑦ 古仁屋高校活性化振興構想計画全般

オ 実績と展望

(ア) 第1期（平成31～令和3年度）

導入期と位置づけており，留学生の受け入れ先の確保や古仁屋高校と瀬戸内町役場との連携体制を確立した。

(イ) 第2期（令和4年度～）

発展期と位置づけており，「存続」から「振興」・「発展」にシフト変更すべきと考えている。活性化対策室と学校が連携して学校の魅力を高め，連携して情報発信する。

3 実績

(1) 地域みらい留学（主催：一般財団法人 地域・魅力化プラットフォーム）

ア 参画状況

「地域みらい留学フェスタ2018」から現在まで4か年継続して参画している。

イ 目的

島内・島外の生徒にとって、魅力ある高校づくりと、生徒数の確保及び地域全体の活性化のため。

ウ 学校説明会（地域みらい留学フェスタ）等

(ア) 平成30年度

地域みらい留学フェスタ2018（34校，参加者約1,200名）

① 会場

大阪：6/23（土）天満橋OMMビル

東京：6/24（日）TOC五反田メッセ

② 参加者

瀬戸内町役場（企画課職員）

古仁屋高校（校長，教務主任）

古高会（同窓会長），鹿児島県教育委員会

会（高校教育課高校進行係指導主事）



(イ) 平成31（令和元）年度

地域みらい留学フェスタ2019（参画55校，参加者約2,100名）

① 会場

大阪：6/22（土）天満橋OMMビル，東京：6/29（土）ベルサール渋谷ガーデン

② 参加者

瀬戸内町役場（古仁屋高校活性化対策室長，同室職員，古仁屋高校コーディネーター）

古仁屋高等学校（校長，教頭，教務主任，教務副主任，教務係）

(ウ) 令和2年度

地域みらい留学フェスタ2020オンライン（参画63校，参加者約3,500名）

① 会場

古仁屋高校会議室

② テーマ別説明会（事務局がテーマ毎に学校を割り振る）

7/25（土）・26（日），8/22（土）・23（日），9/12（土）・13（日），

10/3（土）・4（日）

③ 個別説明会（学校毎に設定）

主にテーマ別説明会終了後に学校が個別にZOOMミーティングを開設して参加者の質問に直接回答する形式で実施

④ 参加者

瀬戸内町役場（古仁屋高校活性化対策室長，古仁屋高校コーディネーター）

古仁屋高等学校（教頭，教務主任，生徒若干名）



(エ) 令和3年度（継続中）

地域みらい留学フェスタ2021オンライン（参画70校）

① 会場

古仁屋高校清雲寮（瀬戸内町運営）

② テーマ別説明会

7/25（土）・26（日），8/22（土）・23（日），9/12（土）・13（日），

10/3（土）・4（日）

③ 個別説明会

テーマ別説明終了後に学校が個別にZOOMミーティングを開設，参加者の質問に直接回答する形式で実施

④ 参加者

瀬戸内町役場（古仁屋高校コーディネーター），古仁屋高等学校（教頭，生徒若干名）

エ 実績と課題

(7) 実績（令和3年12月15日現在）

参画から4年目となり，全校生徒100名のうち，23名が地域みらい留学生として本校に入学し，22名が瀬戸内町運営の紫雲寮（男子12名）及び清雲寮（女子10名）で寮生活を行っている（女子1名は親戚宅に下宿）。留学生たちは小規模校ゆえの部員不足が課題の本校において，全員が部活動に加入し，少子高齢化が進む瀬戸内町において，地域の行事にも積極的に参加するなど，学校及び地域の活性化に貢献している。

(イ) 課題

若干名ではあるが都会との生活環境及び学習環境の違いや寮生活になじめない，学力不振などの理由から，進路変更を選択して親元へ帰る生徒がいた。

また，令和2年度以降，地域みらい留学フェスタが週休日（土・日）のオンライン開催に変更となり，令和3年度はオンライン対応者を管理職（教頭）として運営した。準備期間も加えた上半期（4月～10月）は，主催者との文書のやり取りなどが通常の教頭業務に上乗せされる状態が継続され，この期間は慢性的な業務上の負担増となった。対策として，本年度はオンライン会場を古仁屋高校会議室から清雲寮（瀬戸内町運営）へ変更し，オンライン当日（土・日）の準備は古仁屋高校振興コーディネータが担当することで教頭の対応業務軽減につなげた。

(2) プログラミング教室

ア 目的

(7) プログラミングを学ぶことで，論理的思考力を身につける。

(イ) コンピュータを使った職業を紹介することで，進路意識の高揚を図る。

(ウ) プログラミングで活躍できる人材を瀬戸内町から育成していき，古仁屋高校の活性化及び町の活性化につなげる。

イ 主催（事業）

古仁屋高校活性化対策室（魅力ある古仁屋高校づくり推進事業）

ウ 学習場所

古仁屋高校パソコン室（パソコン不足分は，ノート型パソコンで対応。）

エ 対象

1年生全員

オ 日程（予定）および学習内容

総合的な探究の時間（全6回）

1回目 プログラミング言語の仕組みとアルゴリズム

2回目 VisualBasic基礎を使って簡単なゲームを作る

3回目 変数と判断処理の仕組み

4回目 Timerコントロールを使って繰り返し処理をする

5回目 乱数を発生させてランダム処理をする

6回目 キーボードのキーに役割を当てはめる

カ 指導者

奄美情報処理専門学校講師（1名）

キ 古仁屋高校の役割分担

企画準備（2名） 資料準備（1学年職員） 記録・写真（2名） 学級指導（2名）



消毒液準備（1名）

ク 課題

従来、町が別施設で開設してきた講座を、古仁屋高校生対象に場所及び機材を学校が提供するスタイルに変更して再出発したが、外部指導者1名が生徒39名にパソコンを使用して学びを提供するスタイルで行ったため、生徒のほとんどがプログラミング未経験である中では、指導者1名だけでは全体に指導が行き渡らず、教員が指導者及び生徒へのサポートにあたらざるを得ない状況となった。継続するためには外部指導者の増員が求められる。

(3) 「せとうち出前講座」（主催：瀬戸内町教育委員会）の活用

「せとうち出前講座」は町民へ役場職員が提供できる講座を一覧表で提示し、町民が受講したい講座を選択すると、講師（役場職員）が直接会場に向いて講演するという企画である。受講料・交通費等は発生せず予算措置を要しない点が魅力である。本年度は講座と授業を結びつけて以下の学びを生徒に提供した。



ア 総合的な探究の時間（郷土学習）

総合的な探究の時間（1年生）では、「奄美の遺跡・戦争跡地」について、講義を受けた。嘉徳遺跡の出土遺物を実見するなど、郷土の歴史と文化を深く学ぶことができた。

イ スポーツVI（選択）

スポーツVI（選択）の授業において「舟漕ぎ（板付舟）体験講座」を実施した。櫂の使い方の基本と瀬戸内町で受け継がれてきた板付舟の構造的な特徴を学び、最後に2チームに分かれてスピードを競うまで上達することができた。



4 おわりに

令和3年12月現在、地域みらい留学生22名が寮で生活しており、男女合わせて24名（令和3年12月現在）の目標人数をほぼ達成している。一方では奄美市と瀬戸内町を貫く国道58号線のトンネル群が全て開通し、奄美市が通勤・通学圏内（所要時間50分程度）となり、瀬戸内町から奄美市へのバス通学が可能となったが、逆方向の奄美市方面から古仁屋高校へのバス通学は、ダイヤ改正が実現できておらず困難な状態が継続（学校単位での要望ではダイヤ改正は難しく、古仁屋高校活性化対策協議会をとおして瀬戸内町へも相談済み）しており、高校生の奄美市方面への通学が増えることにより、本校では地元中学校出身の生徒数の割合が減少に転じてしまうという課題も抱えている。

今後は、地域みらい留学参画校としての特色を生かし、「地域の中学生から見た魅力的な高校と全国の中学生から見た魅力的な高校との融合」という取組を加えた学校の魅力化・活性化を進め、その成果は瀬戸内町出身の生徒と地域みらい留学生が共に享受できるものとしていきたい。

今後も、地域みらい留学参画校として全国へ向けて本校の魅力を発信し続けるとともに、地域の児童・生徒・保護者から「行きたい」・「行かせたい」学校として選ばれるよう、瀬戸内町と連携して本校の魅力と特色を積極的にアピールしていきたい。

直近の取組としては、瀬戸内町が本校活性化の起爆剤として来年3月の議会で提案し、4月から実施を目指している「給付型奨学金制度」の創設が挙げられる。この制度は瀬戸内町内の中学校を卒業し、本校から国公立大学及び難関私立大学へ入学する生徒を対象としたもので、本校への進学意欲の向上や家庭への負担軽減ができるとともに、古仁屋高校の新たな魅力になると確信している。